

2012年

携帯サイトへGo!→
携帯で教室便りが見られます



教室だより 12月号

公文式本市場教室 火・木 3～7時 TEL 186-61-4936(上平方)

横割教室 月・水 3～7時 TEL 61-8891(福島方)

指導者: 新妻ゆき子 携帯090-2260-0671

Eメール:yvonne-yukiko@mbi.nifty.com

携帯アドレス:yvonne-1682-yukiko@docomo.ne.jp

ゆきこくもん

検索

ホームページ <http://www.yukiko-kumon.com>

子どもたちを「見守る」ことの大切さ

冬の足音が聞こえてくる時期となりました。12月の異称、師走(しわす)は、師(僧)が各家で経をあげるために馳せる、「師馳す(しはす)」が由来だと言われています。「師」には「人を教え導く人」、「手本となる人」という意味があり、それぞれの人の特徴を知った上で見守り、適切な助言を与えるといった印象を抱きます。

子どもの教育は、何もかも懇切丁寧に説明し、教え与えていくことを続けていると、習っていないことは何もできない、受け身の子どもに育ててしまう可能性があります。公文式では、できたときはほめ、新しい内容のときは励まし必要なポイントは適切にアドバイスし、子どもが自分の力で進んでいけるように見守っています。

公文式の創始者・公文 公(くもん とおる)先生の言葉より

*自学自習で進んでいくために大切な国語力

数学の学力が低い子、とくに文章題のできない子をよく観察してみると、ほとんど例外なく国語の学力が低いということがわかります。これとは逆に、たとえば幼児で方程式以上の高い教材を学習している子どもたちは、例外なく国語力が高く、とりわけ読書好きであり、年齢相当よりもはるかに高いレベルの本を、月に数十冊も読んでいるのです。公文式の値打ちは、自学自習で学年を越えて進んでいけることです。自学自習ということを考えた場合、国語力や読書力が大切になってきます。この先、高校教材に進むことを考えましたら、やはりどうあろうとも読書力を高めておかなければなりません。

公文式国語教材の学習と同時に、「くもんのすいせん図書」の活用を大いにおすすめしたいと思います。たくさん本を読むことが、公文式の学習との相乗効果を発揮して知的欲求を高め、さらに高度な本や専門書、原書の読書へと発展していくことでしょう。



2012年 12月の学習日

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

本市場教室日□

横割教室日△

明るい火に集まってきた虫が自分から火の中にとびこんでしまふ。自分からすすんで、不幸や危険の中にとびこんでいくことのたとえ。

「大そうじをしているときに来るなんて、とんで火に入る夏の虫だね。ろう下のぞうきんがけを手伝ってね」

くもん出版刊「ことわざカード」より

今月のことわざ

とんで火に入る

なつの虫

様

KUMON

【第21回】公文式学習法

5. 学力を定着させる＜標準完成時間＞

学習を先に進ませるか、同じ段階をくり返し練習させるか、一般に家庭や学校では、適切な練習量の明確な基準がありません。そのために子どもに無理をさせたり、必要もない練習を強いて足踏みさせていることが多いのです。

公文式では、そのような無理や無駄がないよう、学力の内容をチェックする基準をもうけています。

それが「標準完成時間」です。標準完成時間は、それぞれの段階の問題の内容や量から見て、これくらいの時間で100点にできなくては、その段階の力がついたとは言えないという基準です。

同じ100点でも、くり返し練習すると、完成時間は必ず短縮してきます。ゆっくりしていねいに解いているつもりでも、結果として時間が短くてすむのです。この基準は、過去30年余り、のべ700万人の指導事例を検討、分析して定められたもので、非常に多くの子どもを指導してきた公文式ならではの、自信を持てるものです。

国語や英語については、算数・数学に比べて、時間で習熟度を測ることに疑問を感じられるかもしれません。

確かにいくら速くても、あまりに乱雑だったり、文章を読まずに設問を解いていては、学習効果は望めません。

しかし、公文式の教室では「正しい学習法」を徹底したうえで、完成時間をチェックしています。また、設問の内容も、転写や文の書きかえ、要約など、作業的な要素を多くしているので、標準完成時間を復習の基準にすることができるのです。子どもを勉強ざらいにしないコツは、いちいち考えこんだりしない、さほど難しいと感じさせない問題をさせることです。鉛筆をすらすら動かせる問題なら、子どもは学習に集中できます。そして、集中するからこそ、本来の学力として身につくのです。標準完成時間は、すらすらできる状態を保ち、確実に学力を定着させていくための明確な基準です。

6. 学力に余裕を生む＜学年を超えた学習＞

公文式を続けていると、学校で教わっている内容より先に進むようになります。しかも、100点をとりながら、ごく自然にです。公文式では、4～5年以上学習を続けている子どもがたくさんいます。もう、とっくに学年相当のところは超えているのに、自分の力で進む学習が楽しいからやめられないのです。世の中には、やれば効果が高くても、長続きしにくいものがたくさんあります。せつかく始めても、過程がつらいと投げだしてしまうのです。

ところが公文式は、長続きできて、らくらくと先に進めます。その秘密は、公文式の教材構成にあります。

高校・大学へ進んだときに必要な大切な部分に内容をしぼり、なおかつ、それらを体系的に、少しずつステップアップするように組み立ててあるので、その前の段階を何度もくり返して練習すれば、次の段階へ着実に進めるようになっています。また、難しくなって苦しくなる前に復習をして、100点を積み重ねて進みますから、学年相当をこえても、学習がいやになりません。それどころか、自習をくり返すうちに、新しい問題に、それまでの知識を総動員していどむ力がつき、次第に創造的な課題に取り組むようにもなります。

こうなればしめたもの。小・中学生では自信が学校生活を楽しいものにし、社会や理科などの勉強をも楽しくします。試験も進学も、余裕を持って迎えられるようになるのです。こういう子どもたちは、高校へ進んで授業の密度がきわめて高くなっても、あわてません。勉強のやり方を知っているからです。公文式で高校の内容を既に前もって学習しているからです。余裕を持って、充実した高校生活を送り、やりたいことを見つけて、希望の大学へ進学していくことでしょう。それには、途中で投げださないで公文式を続けることが、いちばんらくで得なのです。

ゆき子の一言コラム 小学校1年生の勉強が土台に

3. みんなと同じ勉強を詰め込むよりも、重点を絞った勉強で頭をよくする子供の生活は、1日24時間の中で限られています。しかも、子供は、成長する期間も限られています。その年代は、一生戻ってこない貴重な時間です。ですから、家庭生活の中では、子供の教育を何よりも優先して考える必要があります。今の社会は、昔と違って、多くの子供が塾や習い事に行くようになっています。しかし、人と同じような勉強しているから安心できるかというと、そうではありません。他人と同じ路線で勉強していると、もっと時間をかけてがんばるという方向に進みがちです。ところが、教室で先生に教わるような形の勉強は、きわめて能率が悪いのです。

塾や習い事の勉強の多くは、学校で一斉授業を聞いているときの勉強と本質的には変わりません。聞かなくてもともと分かっているという無駄な時間がかかなりあるのです。能率のよい勉強は、ひとりでやるか、専属の家庭教師がつくか、両親が徹底して面倒をみるか、いずれかの形の勉強です。このような勉強であれば、もっと密度の濃い、無駄のない、したがって余裕のある勉強ができます。

時間をかけて成績をよくするのではなく、重点を絞って頭を良くする、というのが公文式の勉強法です。(次号に続く)